

令和 2 年 4 月 15 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03019

研究課題名(和文) 内容言語統合型学習を基本とした共通語としての英語授業の言語測定評価システムの開発

研究課題名(英文) Developing a Language Assessment System in a CLIL-Based ELF Class

研究代表者

中村 優治 (NAKAMURA, Yuji)

慶應義塾大学・文学部(日吉)・教授

研究者番号：40249074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は内容言語統合型学習(CLIL)を基本とした共通語としての英語(ELF)授業の言語測定評価システムの開発を目的として行われた。授業は内容、言語、思考、協学を有機的に結合させながらおこない、またテスト・評価は授業と表裏一体という基本的立場から手順を授業案、授業実施、測定、検証、授業案再構成、テスト再開発の流れの中で開発された。関心意欲態度といった心理部分、言語の多様性への意識の変化などの内面的部分の評価をアンケートで行い妥当性を検証した、また、言語の測定に当たってはルーブリックの使用とディスコース・シンセシスの手法で読解力のみでなく発信力との一貫性についても測定を可能とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的はELF/EILクラスの特徴を生かすと同時に、テレビ会議型学生参加討論授業を実施し、学生の講義への深い関わり合いを生じさせることであった。関心意欲態度といった心理部分や言語の多様性への意識の変化など内面的部分の評価はアンケートによって行った。因子分析で各項目の妥当性を検証し広く学外に公開、共有できる素地が固まったことは大きな収穫である。さらに言語の測定はルーブリックの使用とディスコース・シンセシスの手法で読解力のみでなく発信力との一貫性についても測定を可能とした。同時に相互コミュニケーション力は質疑・応答の項目で評価し検証をおこない実用性もあきらかにしたことは意義深いと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In EIL/ELF, not only teaching but also testing or assessment should be essential. How can teachers of an EIL/ELF course filled with students of mixed levels of English proficiency levels deal with the assessment of language skills, content knowledge and awareness of the varieties of English?

It might be a good idea to stream the classes based on English proficiency or awareness levels of English varieties, so that the students are relatively homogeneous in terms of the category. Existing English standardized tests should be administered to check students' proficiency levels so that they can be placed in an appropriate level. In order to determine their awareness of English varieties, we need to administer an instrument such as the EIL Awareness Measurement Scale. Once the ELF class becomes nearly homogeneous in terms of their language proficiency and awareness of English varieties, we can objectively measure their content knowledge and understanding of the CLIL course.

研究分野：言語テスト論

キーワード：ELF CLIL Testing Assessment EIL Rubric Integrated skills

1. 研究開始当初の背景

文科省の「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(2011)や日本学術会議の提言(2010)において、英語母語話者英語ではなく「国際共通語としての英語」を日本人の学習目標にすることが示された。このことは日本の英語教育政策がEFL(English as a Foreign Language)志向からEIL(English as an International Language)または、ELF(English as a Lingua Franca)志向へと転換されたと考えられ、その意味するところは非常に大きく、英語教育現場に投げかけられた課題も多い。教育方針変化の始まりは一般的には社会的あるいは政治的な変化に伴い新しい状況が生まれたときにそれが新しい教育システム、方針の手順必要性が生まれることになる。新しい社会のニーズとは多様な社会状況に関する知識とそれを理解し処理する技能の習得であると考えられる。つまり、統合することが英語教育に求められたと考えられる。

国際社会のグローバル化にともない、世界的に活躍する人材育成の場としての大学教育の役割は大きい。その一端を担う英語教育の分野では、高校でも、中学でもコミュニケーション能力の養成が重視されてきたが、コミュニカティブアプローチではまだ十分に系統だっているとはいえない。そこで、内容言語統合型学習(CLIL)は「使いながら言語を学び、学びながら言語を使う」を念頭に語学教育を意図的に目標、内容、指導法、教材が選択設計されている点で斬新と考えられる。しかしながら、指導・教育と表裏一体をなすテスト、評価・測定については困難であることに変わりはない。いまだ言語能力のみを、しかも英語母語話者英語 Inner Circle の英語のみを中心にした測定基準が主流であった。英語を第二言語とする Outer Circle の英語話者との基準、あるいは英語を外国語として学習、使用する Expanding Circle 同士の英語基準など EIL/ELF(世界共通語としての英語)の視点から見たコミュニケーション能力の指導及び測定は実質的には議論も実施も行われてこなかった。当時は、外部テストの言語能力テストのみを国際コミュニケーション能力として授業の成果として取り入れているのがほとんどであった。

CLIL を通しての外国語習得には内容に関する知識は大変重要である。例えば筆者(研究代表者中村)の開講科目(1) English and English Education in Japan in the Age of Globalization: グローバル化時代の日本の英語と英語教育 (2) English and English Language Education in East Asia: 東アジア地域の英語と英語教育、においてはグローバル化、言語教育政策、国際共通語としての英語の多様性などに関する高い認知力、広い背景知識が内容理解に影響をあたえたと考えられた。従って言語能力とこれらの知識・技能を一本化したテスト課題が必要となってくることが想定された。さらに安定した測定値を得て信頼性を確保するために複数の異なった課題で測定することが求められる。CLIL の場合にはテストの範囲を明確にすることが必要であるが、言語と内容と技能を一本化させてテストするためにはそれぞれを明確に規定する必要がある。本研究はそのような状況で、テスト作成者の立場にある教員がこれら4つのCつまり、内容(Content)、言語(Communication)、思考(Cognition)、協学(Community)をどのように統合させて、どのような方法でテスト(測定、評価)を行えばよいのか一石を投じようとするものである。

2. 研究の目的

2021年度を目標に中教審は外国語教員には従来の読む、聞くのみならず、書く、話すを含めた4技能を高め、その成果を正しく、かつ公平に評価することを求めている。これまで4技能を取り入れた授業を実施しているところはかなり見られるようになったが、学習者のパフォーマンスを伴ったコミュニケーション能力をどのように測定、評価するかについて十分な検証がなされているとはいえない。

本研究では小、中、高の流れを踏まえつつ、公教育の最終段階である大学における内容言語統合型学習(CLIL)を基本とした世界共通語としての英語(ELF)授業の言語測定評価システムの開発をすることを目的とした。1)まず、関心・意欲・態度などを観察、アンケートで測定するシステム開発。(質問紙法、観察用ルーブリック作成)2)次に表出能力(スピーキング、ライティング)の直接言語測定システム開発。Oral Presentation, Paper Submission などによるものを評価用紙と評価基準を用いる。学生はこの作業の準備のために高いリーディング力が要求される。3)グループディスカッションによる学生の討論能力

および高度の受容言語能力（リスニング、）力測定システムの開発。これは主に教員の観察によるもの。4）さらに、学生の内容に関する知識テスト開発。これは多肢選択方式あるいは記述式により内容理解を中心に測定する。例えばグローバル化する日本についてなど。以上は中高を対象とした文部科学省外国語学習指導要領の4つの観点別評価（ア：コミュニケーションへの関心、意欲、態度）、イ：外国語表現の能力、ウ：外国語理解の能力、エ：言語や文化についての知識・理解）に沿ったもので、大学生の能力を高度なレベルで細やかに、また正確に測ろうとするシステム開発をおこなう。以上のものを統括した英語(ELF)授業の言語測定評価システムの開発をすることを目的とした。

3．研究の方法

多言語話者クラスの特徴（共通語は英語）を生かすと同時に、テレビ会議型学生参加討論授業を実施し、反転授業手法により学生の講義への深い関わり合いを生じさせ、双方向型の対話・討論を行う。授業評価はアンケートおよびクラス後の記述評価を基に検証する。コミュニケーション能力評価の測定目標は間接的言語評価であり、Discussion, Presentation, Paper Submission などによるタスクを課すことにより、アイコンタクト、ジェスチャー、ハンドアウト活用、プレゼンテーションスライド活用、音声、スピーチ構造などをデジタル化して検証を行う。関心意欲態度（心理部分）及び言語の多様性への意識の変化（内面的部分）の評価をアンケート、自己評価によって行う。この妥当性を検証すると同時にループリックの作成をおこなう。

能力測定・評価は主に Discussion, Presentation, Paper Submission などによるタスクを課し、アイコンタクト、ジェスチャー、ハンドアウト活用、プレゼンテーションスライド活用、音声、スピーチ構造などをデジタル化して検証を行う。

関心意欲態度といった心理部分、加えて言語の多様性への意識の変化などといった内面的部分の評価はアンケート、自己評価によって行う。この妥当性を検証しループリックにする。以上、総合分析を行い、一覧表（ループリック）を作成する

4．研究成果

内容言語統合型学習（CLIL）は学生の講義資料への深い関わり合いを生じさせ、また討論が中心になるので双方向型の対話・討論の活発なやり取りが学生に提供される。このため、本研究結果は特に EIL（国際共通語としての英語）および World Englishes（英語の多様性）に関して学生に強い意識を促し、言語教育の分野で高い教育的効果が期待される。

授業を通して学生は科目の内容であるアジアの英語、英語教育という内容そのものに関する深く掘り下げた討論、検証ができるのみでなく、英語力（聞き、話し、読み、書く）の技能も向上させつつ、最新のテクノロジーの使用にも慣れていくという意味で特徴的である。英語力とテクノロジーの有効活用により学生の自主学習力とアクティブラーニング力を国際的視野に立って高めようとする点で大きな意義があると考えられる。

これまでの伝統的な授業システムとは異なった視点から授業をとらえ、地球規模の視点でとらえたグローバル化された学習環境、教授環境をスカイプなどを駆使して提供し情報を活用する学生の育成をおこなうことができる。特に TESOL（英語を外国語・第二言語として教える教授法）および応用言語学の分野で著名な学者が世界各国から参加する生の情報を受講学生が得られ、そのことにより学生の英語教授法への考えが、国内的にも国際的にもより広く、深くなると考えられる。

教授法の変化（CLT から CLIL/EMI など）のための目標設定、学生グローバル化への対応変化、コミュニケーション能力テストの開発の糸口をつかむことができる。学生の目標設定はより具体的になり学習効果が期待される。また、より細かい Can-do 記述を行いより高い動機づけもたせることができる。

テストづくりが教育の裏返しであることを教員が認識することの意義は大きい。EIL の概念は強調されてはいるが、その理論を実際どのように授業に取り入れ、科学技術を用いて社会のニーズにあわせて、教室で実施活動し、その成果をどのように測定評価することの連結が意識されることは大変意義深い。

テストは、言語の分野では Discussion, Presentation, Paper Submission などによるタスクを課すことにより、また間接的言語評価（アイコンタクト、ジェスチャー、ハンドアウト活用、プレゼンテーションスライド活用、音声、スピーチ構造など）や関心意欲態度といった心理評価はアンケート、自己評価によって行なわれ、この妥当性を検証しルーブリックにできたことは意義深い。検証された評価項目および基準はテストの視点から言語コミュニケーション能力、言語周辺能力、およびコミュニケーション活動対応力の目標設定のために活用することができ、大学のみならず高校、中学の教室内目標設定にも応用できると考えられる。また英語国際コミュニケーション能力の経年的変化分析が可能となると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 J.S.Lee, R.Sadler & Y.Nakamura	4. 巻 30
2. 論文標題 Effects of videoconference-embedded classrooms (VEC) on learners' perceptions toward English as an international language (EIL)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ReCALL	6. 最初と最後の頁 319 ~ 336
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Y.Nakamura	4. 巻 1
2. 論文標題 Issues of Testing Content and Language in an ELF CLIL class	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the 43rd National Conference of the Japan Association for Asian Englishes	6. 最初と最後の頁 53 ~ 56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Y.Nakamura & A.Murray	4. 巻 1
2. 論文標題 Analysis of the Course Evaluation Results of an ELF Class	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the 23rd Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 59 ~ 60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 J.S.Lee, H. Okabayashi & Y. Nakamura	4. 巻 1
2. 論文標題 Development and validation of English as an international language perception scale	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the 23rd Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 65 ~ 66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Y. Nakamura, J.S. Lee & K. Lee	4. 巻 30
2. 論文標題 English as an International Language Perception Scale: development, validation, and application	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Language Culture and Communication	6. 最初と最後の頁 189 ~ 208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Yuji Nakamura	4. 巻 49
2. 論文標題 Assessment of EIL/ELF in the Classroom	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要	6. 最初と最後の頁 133 ~ 143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuji Nakamura and Adam Murray	4. 巻 39
2. 論文標題 Construct of and EIL/ELF Assessment Scale for a CLIL Course	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 39th National Conference of the Japanese Association for Asian Englishes (JAF AE) Proceedings	6. 最初と最後の頁 14 ~ 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Y. Nakamura
2. 発表標題 Two Sides of the Same Coin: Teaching and Testing
3. 学会等名 The Multicultural Education Conference in Tokyo (MECTokyo) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Y.Nakamura & A.Murray
2 . 発表標題 Analysis of the Course Evaluation Results of an ELF Class
3 . 学会等名 PAAL Pan Pacific Association of Applied Linguistics (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 J.S.Lee, Y.Nakamura & H.Okabayashi
2 . 発表標題 Development and validation of English as an international language perception scale
3 . 学会等名 PAAL Pan Pacific Association of Applied Linguistics (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Y.Nakamura & A.Murray
2 . 発表標題 Issues of Testing Content and Language in an ELF CLIL class
3 . 学会等名 JAF AE(The Japan Association for Asian Englishes) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Y.Nakamura & A.Murray
2 . 発表標題 A Longitudinal Analysis of Teaching and Testing in an EIL/ELF Classroom
3 . 学会等名 KASELE(Kyushu Association of English Language Education)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuji Nakamura
2. 発表標題 Assessment of EIL/ ELF in the Classroom
3. 学会等名 JACET 全国大会2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuji Nakamura and Adam Murray
2. 発表標題 Construct of an EIL/ELF Assessment Scale for a CLIL Course
3. 学会等名 JAFAE (日本アジア英語学会) 2017
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuji Nakamura and Adam Murray
2. 発表標題 A Longitudinal Analysis of Teaching and Testing in an EIL/ELF Classroom
3. 学会等名 KASELE (九州英語教育学会) 2017
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考